

Title	セシリー・マクワース「若きマラルメ」(4)(翻訳)
Sub Title	《The Young Mallarmé》 de Cecily Mackworth (4) : traduction
Author	Mackworth, Cecily(Harayama, Shigenobu) 原山, 重信
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.45 (2007. 9) ,p.77- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20070930-0077">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20070930-0077</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## セシリー・マクワース 「若きマラルメ」(4) (翻訳)

原 山 重 信

ジャーナリスト、ステファヌ・マラルメ

1871年5月1日、〈ロンドン国際博覧会〉がサウス・ケンジントン博物館<sup>1)</sup>の近くの〈園芸組合〉の回廊と庭で開かれた。この種の博覧会は次第に流行ってきており、ヴィクトリア朝時代の人びとはこれを敬愛した。彼らは参加各国によって展示された莫大な量の高度に装飾的な家具、複雑な時計、飾りのついた陶磁器、東洋の絨毯、そして精巧な宝石類を見るのを好んだ。特に人びとは、「フェザリングする<sup>a)</sup> プロペラ」、特許権を得た有害動物窒息剤、特許のある高架鉄道の模型、計算機といった「最新の科学的発明品」を展示する区画を楽しんだ。これは皆、堅実で、華やかで、一般に進歩と繁栄を匂わせる時代精神によく合致していた。フランスが、普仏戦争と帝政の没落によってもたらされた恐ろしい大変動にも拘わらず、見事な展示をやったのけたのを見ると、格別に元気づけられる。

ヤップ家は、この種のさまざまな展覧会と長く関わってきた。というのももヤップ氏は、1867年の〈パリ万国博覧会〉カタログの英語版だけでなく、1851年の〈万国大博覧会〉と1854年の〈教育展〉の記述目録を編集していたからである。この年〔1871年〕、父親はカタログに関わっていたとは思われないが、一族は以前にもまして深入りしていた。

彼らは、危険が多く、いろいろな点で悲惨なパリでの1年の後、ロンドンに戻っていた。ジョージ・ヤップは、戦争が勃発する前に『デイリー・テレグラフ』紙の通信員を務めるのを辞めており、恐らくその近づきつつある〈博覧会〉を扱う仕事で、ケイトと共にロンドンに戻っていたのだ。ヤップ夫人

は、エティー、フローレンス、イザベルと共に居残っていたが、何らかの理由でプロシア軍が町の周辺に迫る前に経つことができなかつたのである。ワグラム広場の家<sup>b)</sup>は、ドイツの前哨部隊からの砲撃の最前線にあって、食糧は不足しており、ヤップ一家が、パリの最も貧しい人びとの一部のようにネズミを食べる羽目にならなかつたとしたら、彼らは他の皆と同様飢餓に苦しんでいたことだろう。町にはほんの僅かなイギリス人ジャーナリストしか残っておらず、これが、包囲された人びとが外界と連絡を取ることでできるほとんど唯一の手段であつたから、彼らのレポートは気球によって急信として発送されなければならなかつた。空から落ちてくるこれらの書状を拾い上げた地方にいるフランス人たちは、最も近いまだ占領されていない町へと彼らを運ぶように求められた。勇敢なエティーは、この方法で『クイーン』紙に生々しいレポートを送り、「エリアヌ・ド・マルスイ」は読者たちの間で、かなりの名声を得ていた。しかし、その家族には悲劇もあつた。包囲された何箇月もの間の過酷な条件は、虚弱な幼いイザベルにはひどすぎて、ヤップ家の人びとはやっと英仏海峡を再び横断した時、末の妹〔イザベル〕の喪に服していた。

ケイト・ヤップはいつもマラルメの大のお気に入りだつた。もう幾年か前にエルネスト・フィロノーと結婚していた。この人物は〈博覧会〉のフランスの区画を指揮しているデュ・ソムラール氏のアシスタントだつた。だから、マラルメが8月9日にパリの新聞の「特派員」としてロンドンに着いた時、〈博覧会〉を取材するためにあらゆる便宜が得られる確証が持てたのである。

このマラルメの2度目のロンドン出現と、予期せぬジャーナリストへの転身は、いくらか説明を要する。勿論、彼は今や9年前にパントン・スクウェアに着いたウブな青年とは随分違つた人物になつていた。結婚によって、疲れ切つた所帯持ち、二児の父となつて、田舎教師の安月給で両方の目的を達成させるために闘つていた。しかし彼は新進の若き詩人の一人と認められてもいて、カチュール・マンデス、ヴィリエ・ド・リラダン、フランソワ・コペ、ヴェルレーヌ、エレディアといった、いずれもボードレルの影響を受け、高踏派の新古典派的因習や滅びゆくロマン派の郷愁に満ちた残響

に多かれ少なかれ反抗して苛立っていた若き前衛作家たちの友人でもあった。「エロディアド」と「半獣神の午後」の初版が既に完成しており、友人たちに賞賛あるいは不同意をもって、しかしいつも驚きの衝撃と共に受け取られていた。その後すぐに、彼を狂気と恐らく自殺へと導きかねない恐ろしい鬱の時代が来たのだった。実際にはそうはならず、「イジチュール」を書き、直接の経験の更なる置き換えを不可能にする形而上学的体系を構築するに至るのである。

このような精神の冒険が、英語の動詞を気が進まない幼い少年たちに教えることとどれほどうまく調和しなかったかは想像に難くない。マラルメはこの職業には才がなく、自分のクラスを正常な状態に保つ能力が全くなくて、自身のその言語〔英語〕の習熟に関して思い違いをしてはいなかったようである。この頃、カチュール・マンデスに宛てて次のように書き送っているからだ。「僕が知っている英単語は、ポーの本の中に出ているものだけです。それにこれなら、リズムを損なうことがないように、うまく発音することができます。辞書を使って、見当をつけ、よい翻訳者になれるかもしれないと思っています」〔1871年3月1日付書簡〕。実際、教えることは、彼には拷問のようなものだった。「彼が不満を漏らすのを聞いたことのあるたった一つのことだった<sup>1)</sup>」とポール・ヴァレリーは述べている。しかし彼は偏狭な視学官たちを憤慨させる独自の方法を用いて良心的に仕事をこなし、文部省中で回覧される破滅的なレポートを送った。それから、家計の帳尻を合わせようという当てにならない希望を抱いて、『英単語<sup>2)</sup>』という教科書に取り組み始めたのだった。この著作に関して、T. S. エリオットは手厳しく次のように述べている。「この奇妙な論文と、見慣れた英語の諺だという印象の下にその論文が提示する一風変わった句の数々を検討すれば、マラルメの英語に関する学識のいかなる風評も雲散霧消してしまうだろう<sup>3)</sup>」。とは言え、その小冊子は彼独自の詩法に関して多くを明かしており、たびたび非難されてきた「不明瞭さ」のいくらかの糸口を与えてくれる。この不明瞭さは、これまでの経歴の中で既に彼に大いに害を為してきており、少なくとも一人の学校視察官の激しい不快感を呼び起こし、「いくつかの正気でない

詩」の作者と見られ、糾弾されたのである。

1871年のこの夏、マラルメはまだ教師生活のこの物憂い単調さに完全に甘んじて従っていたわけではなかった。自分の英語の知識で、何か代わりの生計を立てていく手立てがあるに違いないと彼にはまだ思えた。様々な提案が友人たちから出された。ジャーナリズム？ 図書館での職？ 翻訳？ マラルメはこれらを全て検討し、カチュール・マンデスを模範にして、記者を一度やってみることを遂に決心した。ロンドンの友人たち（ヤップ家の人たちはだいたいパリに住んでいたのも、主としてシャトラン家の人たち）と相変わらず接触を保っており、イギリスの新聞を送ってもらい、ずっと文学事情のニュースを供給してもらっていた。そこに留まっていれば、有益な付き合い、特に何か翻訳の依頼をくれるかもしれない出版業者との付き合いが得られるだろうと彼は感じた。しかし、この町をもう一度訪れたいという強い願望もあったようである。ロンドンには彼にとって苦い記憶を留めていたが、若い頃とても不幸だった場所に関して時として起こるように、彼は郷愁の念をもってこの町を思い浮かべており、後年、「とても人の心をつかめる<sup>4)</sup>」町として描いている。

この間に文学情勢がどんなに大きく変わったかということも、彼は知っていたに違いない。ラファエル前派は今や受け入れられ、ロセッティは芸術界の実力者で、彼らはもはや少し怪しい前衛ではなく、才能、さらに天賦の才をもった人びととして認められ、イギリスが当時自国の一流の芸術家に与えていたかなりの報酬を得ていた。その間に新世代が育ち、イギリスの文芸における革命的要素を体現しており、パリ・ロンドン間の新しくなった接触によって、〈芸術のための芸術〉を信じ、すぐ年上の世代の道徳的、社会的先入観とは、著しく対照的な態度を示す若者たちの名前が明らかになっていたのである。

フランスとイギリスの作家たちの遣り取りは、かなり以前よりも確かにずっと多くなっていた。一般大衆の間でも今やフランスに対する関心と共感が高まっていた。ナポレオン3世の退位、1870年の騒がしい出来事によって、多くの人がこの旧敵に対する態度を見直すことになった。一時的な政治的親

陸によってフランスの芸術に対する態度への共感が増していたのだ。この点において、スウィンバーンの影響は顕著であった。このちっちゃな男は、その赤毛の衝撃、節度を欠く習癖の数々、そして彼を取り囲む漠とした醜聞の雰囲気と共に、『詩とバラード集』の出版以降、一躍有名になった。彼の名前は全ての新聞紙上に登場し、その肖像は店のショーウィンドーに溢れ、その奇行の話は面白みのない善良さに少々飽きつつあった大衆を楽しませたり、憤慨させたりした。若者たちは彼の詩を口ずさみながら、腕を組んで通りを歩いた<sup>5)</sup>。当時、知識人層の全体に、ほとんど〈天の神〉から啓示を得たかのように自らの評価を何とか受け入れさせようとしていたラスキンは、『アタランタ<sup>d)</sup>』を「彼は悪魔のような若者ではあるが、これまで一人の若者によってなされた最も偉大なもの」と呼んでいた。ジョン・モーリー<sup>e)</sup>は『サタデー・レビュー』の中で、それは裁判中のその著者を現代の文書<sup>ひき</sup>誹毀法に服させることになっていただろうというような激しい悪意の攻撃を浴びせた。『コンテンポラリー・レビュー』は「新しい官能的な詩の流派」の出現について喚き立てた。そしてシモンズ博士<sup>f)</sup>は、その著者を「みだらなほら吹き」と呼んだ。スウィンバーンは論戦を賞賛と同様に楽しんだ。そしてほとんど偶然に、彼が自分自身を見たいのとまさに同じように、確かに彼のイメージが創られつつあった。そしてスウィンバーンは勿論、情熱的に親フランス派だった。彼の「〈フランス共和国宣言〉に寄せる〈頌歌〉」は、数え切れないほどの読者をわくわくさせたのだった。フランス文学はにわかには人びとを刺激し、興奮させる存在になっていた。高踏派の詩の翻訳が大抵の雑誌に載り、フランスの戯曲がロンドンの劇場で上演された。人びとはフランスで何が起きているのか知りたがっていた。自分たちが学んだものを嘆いたかもしれないが、少なくともそれは彼らの興味を引いたのである。

このような風土にあっては、前途有望と認められた若い詩人がよく受け入れられる見込みは十分にあった。マラルメは例によって、異なる二者択一の間で決心がつかずに躊躇した挙句、一時教師をしていたアヴィニオンで出会った一人の友人の言うことに従うことにした。

ウィリアム・ボナバルト＝ワイズは、19世紀のイギリスにはかなりよく

見られた、文学の風変わりな裏道を熱心に辿り、自分よりうまくやっている同僚を見下したり、見下すふりをしながら、自分の道を追求できるだけのお金があるような常軌を逸した文学者の一人だった。高貴な家柄のアイランド人で、母親はリュシアン・ボナパルトの孫娘<sup>5)</sup>であり、彼の全生涯は激しい文学上の熱狂の連続だった。彼はサウジー、コールリッジ、シェリー、バイロンにも、それからラマルチーヌにも、そしてギリシアやローマの詩人にも夢中になった。こうした情熱が過ぎると、ラブレーにさらにもっと深くのめり込み、ラブレーを彼の自然の環境のなかで読むためにフランスに行ったのだった。アヴィニョンまで下って放浪している時にプロヴァンスの詩の存在を発見し、またこれに惚れ込んでプロヴァンス語を学び、自らプロヴァンス語で書くことにした。彼はこれを何とか成し遂げ、よくわかるたった一語も決して発音できなかつたにもかかわらず、プロヴァンス語の詩集を何冊か出版までした。

ワイズは自然の成り行きとして〈フェリブリージュ協会〉と接触しており、彼らはしばしばマイヤーヌにあるミストラルの家で会合をもち、プロヴァンス語で書く少数の詩人たちを集めていた。彼らはこの弁舌さわやかなアイランド人の男に楽しませてもらい、興味をそそられ、この男が「南仏人たちをも凌ぐ陽気の魔<sup>6)</sup>」だと知った。マラルメはこの頃、アヴィニョンで教鞭を執っており、彼もまたフェリブリージュたちと接触していたのだった。彼らとの友好はちょうど彼が必要としていたものだった。というのは、激しく内省的な多くの人びとのように、彼はもっと元気に満ちあふれ、社交的なタイプの人びととの付き合いから得るものがあつたからだ。すぐに彼はフレデリック・ミストラル、ジャン・ブリュネ、ルウマニュー、そしてとりわけテオドール・オーバネルと極めて親密な間柄になった。彼らを通してボナパルト＝ワイズと出会つたのだ。

二人はすぐにお互い好きになつた。ワイズはマラルメが友人に求める不可欠の性格をもつていた。彼は詩のために生きていたのだ。学識豊かでもあり、魔術、占星術、鬼神学が好きで、妙に珍しい断片的知識をもつていた。これら全てが若いほうの男〔マラルメ〕の心に響いたに違いない。この男〔マ

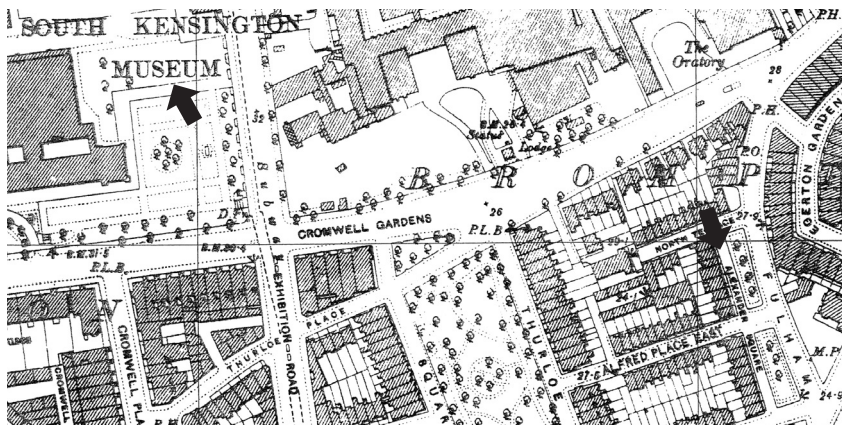


ラルメ]はこの頃、詩人＝錬金術師という概念形成に向かって暗中模索し、「それら古い方式と、詩がそうであるあの魔法との間には秘められた類似が存在する<sup>7)</sup>」ということをますます確信しつつあったのだから。彼らの会話の記録はないけれども、マラルメの古代錬金術師の「植物図集、地図そして典礼書<sup>8)</sup>」に関する少なくとも幾つかの知識はワイズによるものだ、と人は思うかもしれない。

彼らがウィリアム・ベックフォードのことを話題にしていたということを我々は本当に知っている。フォントヒルの常軌を逸した家主は、自分のことをいくらか19世紀のベックフォードの姿で見ているのではないかと疑われる、このアイルランド人の心に必ずや訴えたことだろう。マラルメがベックフォードの『ヴァテック』への序文に取り組み始めたのは、この時だった。当時フランスでは事実上知られていなかった一作品を復活させるように彼に勧めたのは、恐らくシャトランだった。マラルメが紹介状と共に新しい友人をシャトラン家に送ったのは、恐らくワイズのこの問題への関心のためだっただろう。ともかくマラルメをブラッドフォード・オン・エイヴォンの家に招待することによって、イギリスへの旅行を企てるよう促したのはワイズだった。マラルメはこの招待に応じることを切に望んだようだが、旅行費の捻出の問題が残った。〈博覧会〉と、ヤップ家を通じたフィロノーとの<sup>つて</sup>伝が解決をもたらしてくれた。カチュール・マンデスを通して、少なくとも四つの日刊紙のためにイヴェントを報道する仕事を得ることができたが、その一方、『テレグラフ』紙の元同僚で、当時最も有名なジャーナリストだったジョージ・サラ<sup>h)</sup>に掛け合って、その訪問者〔マラルメ〕が、ブロンプトン・ロード(当時はフラム・ロード)からそれたアレグザンダー・スクウェアの1番地に彼〔ジョージ・サラ〕が借りた家<sup>9)</sup>に滞在できるようにしてくれたのは、マラルメの言では「この上なく親切」であることを示していたヤップ氏だった。

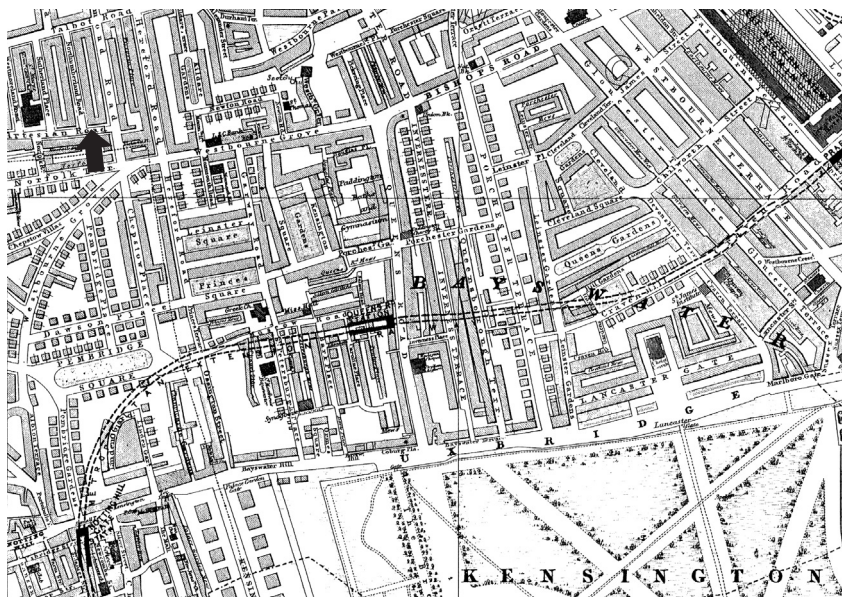
ヤップ一家がケンジントン・ガーデンズの近くのノーサンバーランド広場27番地に居を構えていることを彼は知った。彼らは相変わらず歓迎してくれていたが、雰囲気は1862年の陽気で無頓着な存在とはたいそう違って





アレグザンダー・スクウェア

出典：『2500分の1 ロンドン検索大地図 1792-1897』 柏書房、1993年。



ノーサンバーランド広場

出典：『地図で読む』 ヴィクトリア女王時代のロンドン（時代別ロンドン地図集成）本の友社、1997年。

いた。フローレンスは妹の死を嘆いて神経衰弱に陥り、回復しようと奮闘していたし、エティーもパリでの過酷な数箇月で疲れ切っており、幼いイザベルの死を絶えず悼み、彼女の悲哀を懐かしんで、献身的な友人のガストン・マスペロに「それがあの幼子<sup>おきなご</sup>について私に残されている思い出の全てだから<sup>10)</sup>」と書いた。彼女の健康状態はすぐれず、「未婚のままでいる女性のあの曰く言い難い空気<sup>11)</sup>」を帯び始めていた。それでも彼女はまだ元気いっぱい、熱心に働き、文章を書き、翻訳し、自らの日常生活の生き生きとした記述をパリのマスペロに送り、女王自身の臨席を仰ぎエルネスト・フィロノーも出席した〈博覧会〉を記念した大晩餐会について彼に語り、「我が国自身の偉大なる狂気の詩人スウィンバーンによる<sup>12)</sup>」『詩とバラード集』を読むように促した。「これはとても美しいと思うから、あなたにも知って欲しい<sup>12)</sup>」と。しかしマラルメは彼女が遂にカザリスに捨てられたことを知っていたので、ヤップ夫人は彼を脇に連れて行って、友人カザリスが哀れな娘の人生を台無しにしたと不平を言った。

数日後、ヤップ家の人びとは思いもかけずパリへ呼び戻された。そしてこれが、マラルメがイギリスでエティーに会う最後になったのである。したがって、これが恐らく、少なくとも2篇の最良のソネットの着想の源を提供したこの魅力的な交友の最終段階を描く時なのだ。

才ある若きエジプト学者ガストン・マスペロは、しばらくの間、エティーに惚れていて恋の成就の見込みもなかったが、カザリスとの破綻した恋愛劇の苦さが和らいで消え始めた時、彼女が向かったのは彼の方だった。二人は同じ1871年の12月に結婚し、パリに身を落ち着けた。マスペロは若妻を熱愛し、1873年11月<sup>1)</sup>、彼女が第二子出産の後に死んだ時、彼は悲嘆に暮れた。マラルメは直ちに連絡を受け、同日の夕刻、深い悲しみに沈むマスペロに手紙を書いた。「こんなことがあり得るのでしょうか。彼女が死んだなんて私たちはどうして信じられましょうか、どんな道にも進める可能性があるように思われ、何よりもその慈しみによって、他の人びとの慰めのために……彼女のうちに煌めく燦然たる輝きを働かせるように思われた、この魅力溢れる若い女性が」。そして「私はこの喪失をあまりに個人的な悲しみと見

なし、マラルメ夫人に代わってお話するのを失念しておりました。彼女も同様に悲しみに沈んでおります」という意味深な追伸が書き添えられた。

この交友の物語はエティーの死と共に完全に終わったわけではなかった。マスベロは、やるせない悲しみの状態にいた、だいたいこの頃、パリ或いは恐らくどこか他の場所で、どうやらブラヴァツキー夫人<sup>j)</sup>に会ったようである。マスベロの家族に拠れば、彼が亡き妻と接触できるようになるという希望を抱いて交霊会に出始めたのは、彼女の教唆によるものだった。どうやら捏造されたいい1枚の奇妙な写真が、彼の試みが首尾良く行った「証拠」を示している<sup>13)</sup>。エクトプラズム（心霊体）の雲が年配者の霊媒の体から発している間に、エティーの顔が彼女の上を舞って、フォンテーヌブローのピクニックの後、アンリ・ルニョーが描いたデッサンから呪文で呼び出されたように見える。

ところでマスベロは、これらの実験を行っていた時、マラルメに秘密を打ち明けていた。そしてこの打ち明け話を考慮に入れると、「あなたの愛しい死んだ女性のために、その男友達より」捧げられたソネットは、一般にそれにあるとされてきた意味よりも遙かに明確な意味を帯びる。その詩は1877年11月2日付になっている。したがって、エティーの五回忌に創られたか、送られたことになる。マラルメは、失った友の亡霊が深く悲しんでいる男やもめを、彼の消えかけている炉端で諭しているのを思い描いている。

忘れられた森の上を、暗い冬が過ぎ去る時、  
あなたは不平を言っている、おお闕の孤独な囚われ人よ、  
私たちの誇りになるだろうこの二人の墳墓が  
ああ！ 重い花束の欠如だけでいっぱいになると。

その空しい数を発した〈真夜中〉を聴かないで  
徹夜が君を興奮させて目を閉じないようにさせる。  
古い肘掛け椅子の肘掛けに  
最後の燃えさしが私の〈影〉を照らしてしまわないうちに。

〈訪問者〉が来て欲しいとしばしば望む者は  
墓石をあまりに多くの花々でいっぱいにしてはならない。  
その石を私の指が死んだ力の倦怠で持ち上げるのだから。

かくも明るい暖炉に向かって座る私の〈魂〉を  
再び体験するためには、あなたの唇から私が借りさえすればよい  
一晚中ずっとささやかれる私の名前の吐息を。

その〈訪問者〉という語は、あの写真と関連づけられており、マラルメ自身が得られた結果を信じたかどうか、或いは単にマスベロに対して同情と気遣いを示しているにすぎず、もしかすると彼に自殺を考えることを思いとどまらせようとしていたのかどうかに関して何ら確証はないけれども、明らかにこれらの靈魂の現れを暗に指し示している。

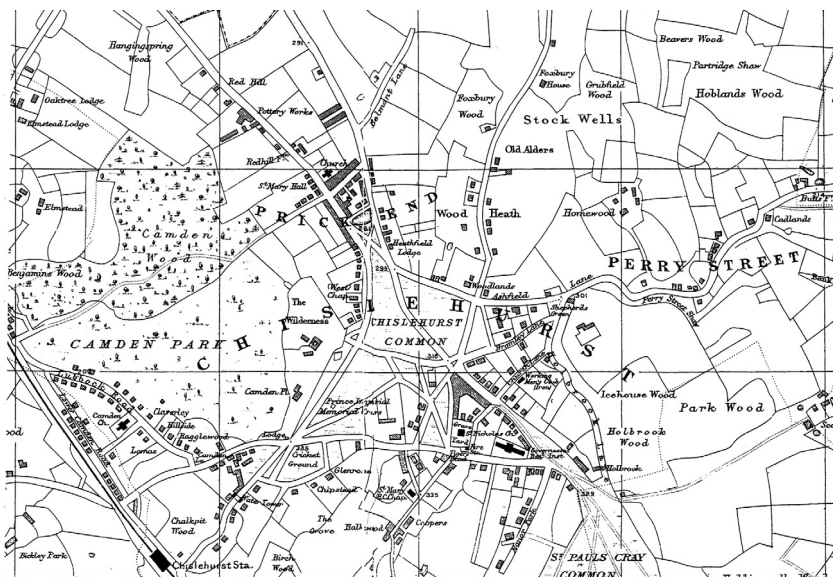
それから、ヤップ一家が去って、誰もただで食事を提供してくれる人もおらず、所持金も急速に減り、彼は今一度ロンドンでひとりぼっちになっていた。アレグザンダー・スクウェアの家は都合良く〈博覧会〉会場の近くにあったので、彼はロンドンでの最初の数日を、その果てしなく続く展示会場を丹念に歩き回って過ごした。それは体の弱い男には辛い仕事で、文章を書く際に時間ばかり気にしなければならないのは非常に骨の折れる仕事だと彼は感じた。「私は毎日毎日この下原稿を書くのを延ばしてきました」と8月13日に出版者ルメールに打ち明けた。「まず私は博覧会というこの怪物を切り分け、それからその小片を私のいくつかの批評記事に分配して、それぞれ一盛り目を送らなければなりません。朝の会場見学と、投函する時間との闘いとは、私の言い訳になるに違いありません」。ルメールと彼はカタログがフランス語に翻訳できないかと検討していたが、予めわかっていたかもしれないように、もう遅すぎてこの種の仕事は引き受けられないことがわかった。「〈博覧会〉を見たいフランス人はもうここに来ています」と彼はがっかりして書き留めた。

それは数多くの幻滅の最初のものであったのであり、直接に実利的な観点か



らすれば、彼がそれを根拠にしてそのような高い望みを抱いていたこのロンドン旅行は、大失敗のようなものになった。二つの新聞は急送された記事にフランスから受け取りの通知さえ決してよこさなかったし、三つ目の『ル・フランセ』紙はそれらの掲載を拒否した。結局、当時のジャーナリズムの文体にかなり近い三通のやや美文調の「手紙」が、L. S. プライスという署名で『ル・ナショナル』紙に載ったが、一方「分配」の残りは永久に失われた。

これが唯一の期待はずれではなかった。ワイズ訪問は、二人がロンドンで出会ったにも拘わらず、決して実現しなかったようである。現地でマラルメは「ワイズは数日しか私のために割いてくれる時間がありません」と書いた。彼ら是一緒にチズルハースト〔ロンドン南東部の地区〕へ謎の遠征に行っただと思われる。そこにはナポレオン3世が家族と共に逃亡生活をしていた。8月15日付のカチュールとジュディット・マンデスへの手紙には、「我が君



チズルハースト

出典：[地図で読む] ヴィクトリア女王時代のロンドン（時代別ロンドン地図集成）本の友社、1997年。

主を祝日にお祝いしに、ちょうどチズルハーストへ出掛けるところです」という追伸が付いている。マラルメが、ほぼ全てのフランス知識人のように、元皇帝を忌み嫌い、彼のフランス退去を喜んでいたことを思い出す時、この一言は尚更不可解に見える。8月15日は、支持者たちがお祝いするのを期待したかもしれないような、このナポレオンの誕生日ではなく、彼の守護聖人の祝祭日でもなかった。しかしながらそれは、ナポレオン1世の誕生日であり、マラルメはワイズに同行してチズルハーストに彼の祖母のおじのための巡礼に出掛けたのだと推定されよう。或いはマラルメがチズルハーストを訪ねに出掛けたのは、ワイズ自身だったということはあるだろうか？ したがって、「我が君主」というのは、ボナパルトの家系の生まれとしてのワイズの誇りへの冗談めいた言及かもしれない。

ともかく、彼は絶望的と言っていいほどお金に困っていたように思われる。息子の出産からほとんど回復していなかったマリーは、ひどく心配した。「あなたがそでお金もなく、普通の生活必需品にさえ事欠いていることを考えるとぞっとします」と彼女は8月25日に書き、9月2日には「今日はこれまでよりもっと心配していますよ、かわいそうなあなた。それに私があなたを助けてあげることさえできないと考えると！……あなたに必要なものを送ってあげられないことで、私がどれだけ苦しんでいることか。でも私自身も財布にたった数フランしかないよ<sup>14)</sup>」と書いた。

しかしマラルメにはロンドンに留まるもっともな理由があった。ワイズは信頼できない徴候を示していて、すぐに、おしゃべり癖があり邪険な態度を示し始めた<sup>15)</sup>。しかし、彼は若い友人〔マラルメ〕の人生に重要な役割を果たした。彼をジョン・ペインに紹介し、温かく、甲斐ある、生涯に互る友情への扉を開いたのが他にもないこの人物だったからだ。

ペインはマラルメと同じ年に生まれていた。彼は極度に内気な男だったが、それは恐らくとりわけ不幸な幼年時代を送ったからであろう。それは主として、父親があらゆる形式の芸術を見る際に示す積極的な嫌悪と、息子の詩的傾向を抑えようとする熱意のせいだった。若いジョンは、父親の見たところ、病的に早熟だった。10歳でホラティウスの多数のオードを翻訳し、14歳か

ら19歳の間に、ダンテの『地獄篇』の全体、ゲーテの『ファウスト』の第二部と『ヘルマンとドロテア』、レッシングの『賢者ナタン』、カルデロン『驚異の魔術師』、古代、現代のフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、トルコ語、ペルシア語とアラビア語からの無数の詩の翻訳をしていた。これらの言語は、学校で学んだギリシア語、ラテン語とフランス語は別にして、全て独学だった。事務弁護士としての仕事の残りの空いた時間に、彼は詩や評論を書き、多数の言語で書かれたものをむさぼり読んだ。当然、彼は家や学校の粗暴で物質的な世界には馴染めなかった。

ペインは暗く押し黙ってしまう癖があったが、自分の好む話題の一つを投げかけられると、並外れて生き生きとして、口数が多くなった。彼はマドックス・ブラウン<sup>k)</sup>の文学の夕べ、マーストン博士<sup>l)</sup>の日曜の夜会、チェルシーにあるロセッティの家に入り浸っており、非常に多くの人を知っていた。ロセッティの家で彼に会った或る訪問客は、「その文学の在処の沈んだ雰囲気に衝撃を与えるかのような、彼の外国風の容姿と電撃的激情と表現力<sup>16)</sup>」に強い印象を受けた。その「外国風」は、実はかなり入念に養われていた。ペインはフランスが大好きで、ロンドンよりもパリの文学界のほうが高く評価され、居心地が良いと感じていた。彼はヴィヨンとラプレーを崇拜し、バンヴィルと高踏派たちを翻訳し、ワグナーに心酔して<sup>17)</sup>、彼の愛する詩人や思想をイギリスの読者に紹介することによって、ヴィクトリア朝中期の偏見の島国根性的表層を打ち破るためにできる限りのことをした。

ジョン・ペインは卓越した翻訳家だったが、二流詩人にすぎず、イギリスでは決してあまり評価されていなかった。しかしながら、彼はマラルメがその語を理解する意味では詩人であり、彼の詩はマラルメの初期作品の雰囲気に多くの点で一致していた。マラルメは、その荘厳な音楽が有形のハーブやリユートを必要としない「沈黙の女楽師<sup>18)</sup>」聖セシリアを想起していた。また彼は「象徴的な魅惑をもった音楽の影<sup>19)</sup>」に、自分自身の詩風を発見していた。ペインは英仏海峡の向こう側で、「目に見えないもの」、「見えない霧のようなもの」に表現を与えようと躍起になっていた。彼は最初の韻文集<sup>20)</sup>の読者たちを、「この我が影の国」に入るよう誘っていた。マラルメの



ように、彼は貴族主義的な芸術観を持っていて、一般大衆に対していかなる譲歩もすべきでないと考えていた。マラルメが「最初に来た者どもが傑作の中に土足で踏み込んでくる<sup>21)</sup>」と嘆いたところで、ペインは、テニソンが「彼は偉大な特質があるにも拘わらず……自らの人気は主として、彼が知的に低い階級の弱みにおもねる仕方と、偽装された唯物論と甚だしい楽観主義の最もひどい信条を飾り立て理想化する彼の狡猾な遣り方によるものだ」と残念に思っていた。

かつてロンドンであのようにひどく寂しい数箇月を過ごしたことのあるマラルメは、これらの相性の合う人びとを発見したことが非常に嬉しかったので、そのような類似点の下にある深い相違が決してわからなかった（或いは恐らく決して自分にそうした相違を認めなかった）。感受性が鋭く、美を愛するペインは、マラルメが日常生活に直面する、人を避けるためらいの下に培っていた英雄的な性質に乏しかった。マラルメが「悲しい施療院」〔詩篇「窓」〕の窓の向こうにある喜びを発見した絶対的な断念を、彼は決してしないだろうし、彼の性質はあまりに厭世的でそうした喜びが存在するかもしれないことが理解できなかった。だが、差し当たり、マラルメは無二の親友と言ってよい存在、自分自身の最も深い憧れの反響を見つけたと感じた。「ペインがどんなに非凡な詩人か、あなたは知っているでしょうか」と数箇月後に彼は書いている<sup>22)</sup>。「彼は我々自身のうちの一人です。というのは、彼は我々の時代の詩人たちと同時に発見をし、我々が最も親密に心に抱いている情熱と好みを創り出してきたからです。彼は我々の誰よりもフランス文学を知っています」。

一日中、二人の若者は果てしなく言葉を交わしながら、ロンドンの通りをぶらついた。ペインは「曰く言い難い魅力で」フランス・ロマン派からのお気に入りの詩を幾篇か朗唱した。マラルメはきっとポーについて話したに違いない。ポーは彼にとって「我々の時代の知的な〈神〉<sup>23)</sup>」に相当し、その『構成の哲理』を、彼はイギリスやアメリカの誰がしたよりも、或いはいつかするだろうよりも、真面目に受け取った。どうやら彼はペインに自身の情熱を吹き込んだらしい。というのは、ペインはこの会合の後、ポーに負っ

ている恩義と自作品が「大鴉」と「ウラルーミ」から影響を受けた手法にしばしば言及したからである。まさにこの二篇の詩はマラルメが最も愛した詩である。ペインのほうは、スウィンバーンのことを話した。彼は『カリュドンのアタランタ』と『詩とバラード集』を、その中に感知した「あからさまの堅さ」ゆえに好まず、『日の出前の歌』は彼を支持者たちの中でも最も熱烈な部類に転向させたのだった。マラルメはスウィンバーンに関する話をたくさん聞いていたが、どうやら彼の作品はどれ一つ読んでいなかったらしい。しかしながら、彼はフランスに、恐らくはペインからの贈り物として、一卷ないしは、さらに数巻を持ち帰った。ペインは「我が国の偉大な詩人スウィンバーンの作品を、君が初めて読む喜びを羨ましく思う」と数日後に彼に書いた。

この最初のロンドン散策は、双方の若者にとって、あのフォンテーヌブローのピクニックがかつてマラルメに与えた魔法のような魅力を再創造したように思われる。それは後の訪問で繰り返され、ペインはこれらのうっとりした夕べを一つの詩の中でフランス語で祝った<sup>24)</sup>。

友よ、あの長話しを覚えているだろうか？  
 僕たちは夕べに〈蛇行〉に沿ってそぞろ歩き、  
 うっとりした目で、銀色の光線を追い、  
 その光線は、夢想のバラ色の色合いを帯びて、  
 ゆっくりと、雲の切れ間に沿って、立ち去ろうとしていた。  
 甘美に、夜は静謐な葉叢の上にやって来た、  
 そして、錫の花模様のついた、サテンのようにつややかな水の中に、  
 花ガス灯は [ママ]<sup>m)</sup> 自らの和らいだ炎を突き刺していた。  
 その間、僕たちは夕日をいっぱいに浴びて、おしゃべりをしていた、  
 偉大で強い〈芸術〉について。この〈芸術〉という高貴な女主人  
 それは僕たち二人の心にその豊かな愛を差し出す。  
 僕たちの唇の上で——絶えず帰ってくる反復句——  
 愛する詩句が、偉大な友人たちの名前を歌っていた。

ロンドンは、僕たちにとって、今晚、パリに戻っていた。

別れると、二人の詩人は終生の友となっていた。ペインは、マラルメが初めにカザリスに与えた「〈兄弟〉」の呼称で呼んだごく少数の人物の一人だった。ペインはというと、彼はマラルメの中に「えも言われぬ魂と黄金のように思いやりのある心<sup>25)</sup>」を見出した。その時から、お互いがさらにいっそう相手のために飽くことなく働いた。お互いが相手の友人の輪の中に統合され、お互いにとって新しい仲間として広げられた新しいいろんな好機によって、彼の名前はよく知られるようになった。

### 訳者後記

本稿を読むことで、後に見ることになるロンドンの週刊誌『アシニエーム』へのマラルメの寄稿は、シャトランからロンドンの新聞の類を送ってもらっていたことから得られたアイデアであろうことが明らかになるように思われる。マラルメは、これを逆方向に、さらに公に向けて行ったことになる。ジョン・ペインの活動も同様に手本になっただろう。詩人のこうしたジャーナリズム活動は、一方では「イジチュール」に刻まれた「精神的危機」からの回復への歩みでもある。このきっかけは、単にパリという都会への移住から得られたばかりではなく、イギリスという外の世界が大きな役割を果たしていることが確認できる。マラルメの1870年代はこのようなして始まった。従来のマラルメ研究において手薄であったイギリスとの関連に関して、さらに精査されてしかるべきである所以がここにある。

ここではボナパルト＝ワイズ、ジョン・ペインに関する詳細が明らかにされている。我々に残された課題は、それぞれの著作に直接当たって、これを読解すると共に、それぞれの数少ないモノグラフィー研究にも探索の手を伸ばして、マラルメにおけるイギリスと、その交友関係の実態に関してさらに明らかにしていくことであろう。この文献はそのきっかけを与えてくれる最良の素材の一つになっている。

註（数字は原註、アルファベットは訳註）

- 1) 博覧会は、サウス・ケンジントン博物館（現在はヴィクトリア&アルバート博物館）〔位置は本稿 p. 84 及び前項、『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』、第44号、p. 95の地図を参照のこと〕の初代館長のヘンリー・コールによって準備がなされた。マラルメは自分が訪ねる回廊が博物館の一部だと信じていたが、実際にはそれは、帝国研究所が後に建てられた道の向こう側にある園芸組合の庭に設置されていた。
- 2) 『英単語』、パリ、1877.
- 3) T. S. エリオット『ポーからヴェルレーヌへ』、ニューヨーク、1948年、p. 21.
- 4) ポール・ヴァレリー「我がイギリスの若き日々」、『読書人日誌』、1925年12月。
- 5) 『国民伝記事典』の「当代の詩人」によって伝えられる詳説。
- 6) C. ジュールダヌ『フェリプリージュの歴史 1854-1896』、アヴィニオン、1897, p. 35.
- 7) 「魔術」。
- 8) 「プローズ（デ・ゼッサントのための）」。
- 9) モンドール博士とその他の伝記作家たちは、ワイズの招待先はロンドンで、アレクザンダー・スクウェア1番地の家の所有者は彼だったことを示唆している。ジョージ・サラの自伝に拠れば、普段は留守で、『テレグラフ』紙に富をもたらしていた大評判の記事を書くためにあちこち旅行してはいたが、この家に居住していたのは彼だったことがわかる。マラルメのワイズとの文通は、マラルメがロンドンに着いた時、ワイズがロンドンには居なかったことをはっきりと示している。
- 10) ローレンス・ジョゼフ「マラルメとイギリスの女友達」、『フランス文学史評論』、1965年7月-9月 [p. 473.]。
- 11) ジョゼフ、前掲論文 [p. 473.]。
- 12) 同上。
- 13) ロマン・マスペロ夫人の資料コレクションからの未発表書簡。
- 14) モンドール、前掲書、p. 320.
- 15) 1861年、うかつにもワイズと徒歩旅行に出掛けたジョージ・メレディスは、帰宅して「実を言うと、あの可愛いおやじは、度を越して怒りっぽくて、1日に20回も争いを起こし、時にはむっとりしている。……こんな子供っぽい種類のことは私の好みに合わないことが想像できるだろう。女性に会ったなら、女性らしいほうがいいだろう」と報告した。そして同じくワイズと並々ならぬ関係だったジョン・ペインは、すぐにマラル

メに「何よりも、ワイズが僕について言うことは何も信じないでくれたまえ」と書いていた(1872年12月16日)。

- 16) T. ライト『ジョン・ペインの生涯』、ロンドン、1919、p. 31.
- 17) ペインは自著『生と死の歌』(Songs of Life and Death)における最初の詩をワグナーに捧げ、「コスモポリタン六重奏団」に、当時実質的に知られていなかった幾つかの作品を演奏させることによって、イギリスでの突然のワグナー・ブームに多大な貢献をした。
- 18) 〔詩篇〕「聖女」。
- 19) 「エロディアド」〔「古序曲」〕。
- 20) 『影の仮面』(The Masque of Shadows)、ロンドン、1870.
- 21) 「芸術の異端」。
- 22) 1872年7月3日、ミッシェル・パロネ宛書簡。
- 23) 1876年10月〔19日〕、H. ホイットマン夫人宛書簡。
- 24) 『ジョン・ペインの詩作品集』、自費出版、1892年、第2巻、p. 181.
- 25) 前掲書の献辞を見よ。
  - a) 多発機のエンジンの一つが停止したとき、そのプロペラの羽角を90°にして、空気の抵抗を最小にすること(ランダムハウス英和辞典)。
  - b) ワグラム広場4番地。オスマンの大工事の当時、ここはパリのはずれだった(ジョゼフ、前掲論文、p. 461.)。
  - c) ステファヌ・マラルメ『英作文』への序文、1937年、pp. 10-11.
  - d) 詩劇『カリュドンのアタランタ』(Atalanta in Calydon) (1865)。
  - e) ジョン・モーリー、ヴィスカウント・モーリー・オヴ・ブラックバーン John Morley, 1st Viscount Morley of Blackburn (1838-1923) ブラックバーン生まれの自由党政治家・伝記作家・批評家。『フォートナイト・レビュー』主筆(1867-82)、『ポール・モール・ガゼット』主筆(1880-83)。
  - f) ジョン・アディングトン・シモンズ John Addington Symonds (1840-93) ブリストル生まれの詩人・文芸批評家・翻訳家。主著『イタリアにおけるルネッサンス』(Renaissance in Italy) (1875-86、全7巻)。1889年から1893年にかけて書かれた自伝は、自覚的な同性愛者の書いた最初のものである。なお、アーサー・シモンズ Arthur Symonds (1865-1945) は、年代的にみて、この「シモンズ博士」には該当しないと思われる。
  - g) 実際には「孫娘」ではなく、娘である。
  - h) ジョージ・オーガスタス・ヘンリー・サラ George Augustus Henry Sala (1828-1895) ロンドン生まれのジャーナリスト・小説家。1839年から

1842年の間、パリの学校に通う。1857年から『デイリー・テレグラフ』紙に寄稿し、特派員としてアメリカの南北戦争、ガリバルディ政権下のイタリア、1870-71年のフランスなどを取材する。

- i) 『書簡集』第3巻、p. 393の註3に拠れば、エティーが死んだのは9月10日のことであった。マラルメがこれを知らされたのは2箇月弱経ってからであり、この手紙が出されたのは11月2日である。マラルメはこの訃報を受けて「直ちに」文を認めたのは確かかもしれないが、エティーの死を「直ちに」知らされたのではないことは注意しておく必要がある。尚、エティーは享年27歳であった。
- j) エレーナ・ペトロヴァナ・ブラヴァツキー Helena Petrovna Blavatsky (1831-91) ロシア出身の女性霊媒、神智学者。インド、エジプト、東欧を旅し、チベットで〈大師〉の存在を確信したのち、1875年、同志らと共にニューヨークに神智学協会を創設。W. B. イエーツらに与えた影響は有名。
- k) フォード・マドックス・ブラウン Ford Madox Brown (1821-93) フランスのカレー生まれの英国画家。ヴィクトリア朝時代の代表的画家の一人。アントワープ、パリ、ローマ等で絵画教育を受ける。1845年からイギリスに定住し、ウィリアム・モリスらラファエル前派の人びとと親しく交際するも、同派には属さなかった。歴史画・宗教画も描いたが、特に繁栄下のイギリスにおける社会問題をテーマにした作品で知られる。
- l) ジョン＝ウェストランド・マーストン John-Westland Marston (1819-1890) イングランドのボストン生まれの劇作家・詩人。1843年から数多くの劇作を書き、イギリスの民族主義的ジャンルの復興を試みる。彼の作品は英国民に多く受け入れられた。1856年以来、劇作から詩作に転ず。『アシニーアム』にロマン主義的詩作を発表。なかでも「バラクラヴァにおける死の彷徨」は名高い。
- m) 原著の表記通り。この語のみ母国語の英語‘gaseliers’を用いている。